西東京市立ひばりが丘中学校　第１学年　学年通信

陽あたり、良好！

令和２年
９月１８日（金）
【Ｎｏ．２２】

『あなたのうちこみ方は…？』

中間考査が終わりました。今回のテストに向けて、自分が取り組んできた様子を振り返ってみて、あなたはどのように評価しますか？「どうせ無理」という言葉に負けずに、“見えない努力”を地道に続け、自分の身の回りにある“チャンスを生かし”、自分にとって“値打ちのある点数”を取れるように、最大限の努力をすることができたでしょうか…。

ここで、少し振り返ってみましょう。１学年ではこの１か月、学活や総合の時間を使って、「シリーズ読み物」という企画に取り組んできました。学習することの意味や大切さ、学習や部活動に対する姿勢、物事の捉え方や考え方など、様々なことをテーマに取り上げてきました。そして、最終回は物事への“うちこみ方”がテーマでした。

「いいかげんにケイコをやっている力士」と「ジャンケンで卒論のテーマを決めた博士」の話をもとに、真剣に物事に打ち込むことの大切さについて考えてみました。ただ決められた時間に決められた中身でケイコしている力士を“ケイコ不足”と呼ぶなど、自分の身にも置き換えられる話だったと思います。部活動や習い事、そして試験に向けての準備など、本当に身を入れて取り組んでいるのかどうか、もう一度見直してみる必要があるかもしれません。

そういえば、こんな人はいませんか…！？「掃除当番」での話です。教室掃除の時間、決められた時間に決められた場所にはいますし、ほうきも手に持っています。しかし、友達とのおしゃべりに夢中でただその場にいるだけだったり…、床の状況をよく見ることなくゴミをあっちこっちへ移動させるだけだったり…。そんなとき、「ちゃんと掃除しなさい」と注意を受けると、「私、やってます」と自信をもって答える人！！それは、まさに“ケイコ不足”の力士、にそっくりではないですか？本当に一生懸命に教室をきれいにしようという意思をもたずに、おざなりに力を抜いて楽にやっているものを、“ケイコ不足”の力士ならぬ、“ソウジさぼり”の生徒、と呼ぶのかもしれませんよ？？ ?こうしてみると、今回の話は勉強、部活動、習い事だけではなく、日常の生活の中にも教訓として生きていくのではないでしょうか…。

さて、今日は令和２年度後期の委員、係を各クラスで決めます。前期とは違って、中学校生活のことがだいぶ分かってきていますね。これも、自分の身近にある一つのチャンスです。クラスや学年のために、積極的に名乗りを上げてくれることを期待しています！

シリーズ読み物⑷「好ききらいはうちこみ方で決まる」

それでは、今回もみなさんの感想を紹介してみましょう。（「好ききらいはうちこみ方で決まる」は裏面に掲載しました）

「しっかりと打ち込まずに“向いてないかもしれない”というのは、もったいないことだと思った。私も長く続けていたピアノを、“向かないんだ”と思いやめてしまったが、私はピアノに打ち込む努力をしていなかったのかもしれない。もし続けていたらと、後になって悔やんでしまった」

「僕はサッカーをやっていて、小学生のときに自分の好きな練習では意欲的に練習していたけど、自分の嫌いな練習になると、やる気をなくすときがありました。でも、今は嫌いな練習でも頑張ってやったら、その分うまくなっていたと思いました」

「初めてやることは、最初は難しくて、“私にはできない…”と思うことがほとんどです。でも、そこであきらめず、“もう少し頑張れば”と続けていくと、いつの間にかそのことが好きになっていた、という体験を私もしたことがあります。この読み物のタイトルには、とても共感できました」

「本気で練習をするのと、力を抜いて練習するのだと、同じ時間を過ごしていても身につくものが違うのだと思った。与えられた時間はみんな同じなので、その中で力を抜かずに集中して物事に取り組みたいと思った」

「ムダに時間を過ごして、いいかげんにケイコをやっているのに、“オレは相撲取りに向かんのかもしれん”というのは、もっと精一杯努力をすれば解決できるのになと思った。私も、少し勉強しただけで、“この教科は苦手だ”と決めつけてしまうから、まずは一生懸命打ち込んでみて、そこで好き嫌いを決めようと思う。また嫌いなことでも、しっかり取り組めるようになりたい」

「ぼくはゲームが好きだから集中してやるけど、勉強は嫌いだからダラダラやっちゃうけど、そのダラダラのせいで時間をむだにしていると思った。ダラダラをなくせば、その時間で他のことができるから、ぼくは時間をむだにしているんだと気づいた」

「確かにいいかげんにやっている人たちは、一生懸命にやってる人たちよりも、技や力が劣っているだろうから、自信をなくして相撲に向かないせいにして、諦めてしまうんだろうなと思いました。そこで力の差を見せつけられたときに、“負けてられないな”とか、“よし、これからは頑張って強くなるぞ!!”と、今までの自分の悪い行いをバネにして頑張っていたら、すごい相撲取りになっていたかもしれないのに、もったいないなと思いました」

「自分は空手をやっています。僕は水色帯で止まっていたことがありました。失敗するたびに、“やりたくてやっているわけじゃない”と言い訳をして、すぐあきらめてしまいます。だけど母に、“やりたくなければやらないでいいよ”と言われ、この言葉が僕にとって悔しい言葉でした」

「私はこれを読んで、部活動のことを思い出しました。楽したいから、きつい練習のときに手を抜いていました。でも、うまい人たちは、みんな手を抜かずに頑張っていました。だから、これからはきついときこそ、全力で取り組みたいです」

「この話を読み、委員会も同じように好きでも嫌いでも、全力で仕事を行う大切さを学んだ。それにどんな仕事でも、学校のためにあるわけだから、辛くても後悔はしない。だからこそ、１学期は仕事が大変だからという理由で手を挙げなかったが、２学期は必ずいい経験になると見方を変えて、１回でも立候補したいと思う」

「私は、この読み物を読んで、人間関係に置き換えることができると思いました。“この人とは合わない”や“このクラスとは合わない”という人はいると思いますが、私はその人やそのクラスと合う努力をしたのか、と思いました。勉強も、“この教科とは合わない”と思わず、努力する大切さがわかりました」

「僕は、この文を読んで、部活にもっと本気で取り組めるのではないかと思った。また、打ち込む力は、未来の自分を決めるために大切と思ったので、つけていきたいです」

「私はこの物語を勉強にも置き換えられると思う。私は理科が苦手だが、今回のテストで納得できる点数を取れるようにと、ワークなどを何回もやり直して打ち込んでいる。そのおかげで、理科の苦手な問題も解けるようになってきた。だから、この物語を読んで、打ち込むことはとても大切なことだと改めてわかった」

「何事も一生懸命やっていくことが大切なんだな、ということが分かった。ぼくは物事をやりはじめる前から、この仕事はつまんないから、楽しくないからとあきらめていてばっかりだったけど、この読み物を読んで、もっと深く物事に集中して色々な仕事に真剣に取り組めるようになっていきたいです」

「私も、何も努力してないのに、自分には向いていないんだと思っている人と会ったことが何度もあります。その度に、私は腹立たしい気持ちになりました。努力をせずに物事が上達するなんていう奇跡は、起こるわけがないんだと言ってやりたかったです」

「自分も嫌いなことがあったりすると、どうしても力を抜いてしまったり、楽な方向へ流してしまった経験がある。実際に手を抜いてしまったことが、後から後悔することとなってしまった。そこから自分は、苦手なことでも自分から積極的に取り組み、悔いの残らないように意識することができた。これからも続けていきたいです」

「得意ではないけれど一生懸命やる人、得意だから手を抜いてやる人だと、日を重ねるにつれて差が出てくると思った。また、得意でも手を抜いてやっているとそれが分かるし、何事にも一生懸命やっている人は、得意でなくても魅力的に見えるし、応援したくなる。改めて、どんなことでも一生懸命やった方がいいと思った」

「楽をするのが目的だったら、何もしないのがもっとも楽じゃよな。でも、そんな生き方ってホントに楽しいかのう…。今のみんなは、ものすごいたくさんの可能性を秘めているんじゃよ！勉強も、部活も、仕事も、趣味も…、み～んな全力投球じゃ！！」

シリーズ読み物(4)

「好ききらいはうちこみ方で決まる」

どんな仕事でも、うちこんでしないと興味がわかない。その仕事に自分が向くか向かないかも、うちこんでみてはじめてハッキリわかる。

相撲の解説者の玉ノ海さんが言っていた。

「あの力士はケイコ不足だ、とよく新聞記者の人が言うことがあるが、ケイコはみんなひととおりやっているから、ケイコ不足などありはしないですよ。しかし、では本当にケイコ不足の力士はないかというと、あるんですね。毎日ケイコ場へ出て、みんなヨイショヨイショとやりますが、その中で本当に力をこめてうちこんで汗と砂にまみれてやるものと、時間どおりやるにはやるが、実におざなりに力を抜いて楽にやっているものと二通りいます。前者はあすの日新しい力を授かって白星を重ねている、後者は黒星が続くということになる。この後者、つまりムダに時間をすごして、いいかげんにケイコをやっている力士を、われわれの仲間ではケイコ不足といっているんです。そういう連中がきまってオレは相撲取りに向かんのかもしれん、とコボしますね。」

都立大学の総長をした永井雄三郎博士がまだ大学生当時、卒業論文のテーマに「石油に対する硫酸の作用」という本を選んだ。ところが友人が同じものを選んだので、ジャンケンで決めることになり、結果永井さんが勝った。そこでそのテーマで卒論を書いたのがキッカケで、永井さんは燃料の研究にとりつかれ、燃料と潤滑油に関するわが国最高の権威になったという。

もしこのとき、永井さんがジャンケンで負けたとしたらどうなっただろうか。別のテーマを選ぶんであろう。それでも永井さんはきっと、その選んだテーマに取り組み、その道の権威者になったにちがいない。

考えてみればジャンケンでことを決するなどタワイのない話だが、それだけに永井さんは、どうでもこのテーマでなければならぬと考えていたのではないだろう。だが勝っても負けても自分の選んだ道にうちこんだ人にちがいない。それでなければ、大成は望めない。

仕事の好ききらいを言うまえに、どれだけ仕事にうちこめたか、愛情を抱いて精進したかを思うこと。さまで努力もしないで、気に入らないからといって、「向かないんだ」と文句を言っても、泣言に終わるだけだ。

《感想》　1年(　)組(　)番　氏名(　　)